

2015.11.14 第八回冒頭

第七回 (2015.10.24) 復習と解説

第七回の復習の前に、『マクベス』のテキストに関して、一言申し添えたいと存じます。『マクベス』は、一般に1606年頃の創作と考えられておりますが、シェイクスピアの生前に出版されることはございませんでした。1623年出版の豪華な大判のシェイクスピア戯曲集、一般に第一・二つ折り本(F1)と称している本において、はじめて活字化された作品でございます。仮にF1の出版がなければ、『マクベス』は、現在に伝わらなかった可能性のある作品なのです。

『マクベス』は、シェイクスピアの悲劇の中で最も短く、一般のシェイクスピア作品の約三分の二の長さにすぎません。その理由に関しては、上演用テキスト説や検閲による削除説など諸説ございます。また、魔女の部分は、トマス・ミドルトン(Thomas Middleton、1570?-1627)の手によるとの説が、最近では高くなっております。

第七回のご講演で、神父様は、A. C. Bradleyの*Four Great Tragedies*に再び言及なさり、*Hamlet*は問題劇、*King Lear*は第四幕までは喜劇だが、第五幕で悲劇になる一方、*Othello*と*Macbeth*にはサブ・プロットがほとんどない悲劇であると説明なさいました。*Othello*と*Macbeth*は道徳劇の影響を受けていますが、*Othello*は守護天使のようなデズデモーナの存在で救済の道徳劇となり、*Macbeth*は主人公も女主人公も悪魔的であるがゆえに劫罰の道徳劇であると解説くださいました。*Macbeth*では、罪深いマクベスとマクベス夫人に対して、スコットランド国王ダンカン、息子マルカム、エドワード懺悔王(1003?-66)が神の恩寵を示す人物として登場しています。

シェイクスピア学で重要な比較研究の視点から『マクベス』と『ハムレット』を比較すると、『ハムレット』の問題は幽霊の正体に存在するとお話しになりました。つまり、幽霊の正体が、カトリック的な煉獄の幽霊、煉獄を認めないプロテスタントの悪魔の幽霊、異邦人のセネカの劇の幽霊のいずれかなのが問題になります。

『マクベス』では、魔女が悪魔として登場します。登場人物の悲劇的な行いを理解させるためには悪魔の存在が必要なのだとご説明下さいました。他の悲劇とは異なり、『マクベス』の山場はマクベスの三つの誘惑を描く第一幕と、誘惑の結果としてダンカン王を殺害する第二幕でございます。シェイクスピアは「三」という数字を好んで用いますが、『マクベス』においても、誘惑が三回繰り返されます。

第一幕で三人の魔女が登場し、マクベスへの二つの予言の実現が、三番目のスコットランド国王になるとの予言が実現する可能性を暗示します。これが第

一の誘惑です。第二の誘惑は、スコットランド国王ダンカンが息子マルカムを皇太子(The Prince of Cumberland)の位につけ、マクベスの国王への希望を砕くことで、マクベスに国王殺害の動機が生まれます。第三の誘惑は、マクベス夫人の強力な説得でございませぬ。

第二幕の国王殺害場面は舞台では上演せず、シェイクスピアは殺害前後のマクベスの恐怖心を描いています。神父様は、短剣を擬人化して語るマクベスの“Dagger speech”には聖書の響きが表れていると指摘されました。

少しコメントを加えますと、当時、国王殺しを舞台で上演することは禁止されていませぬ。シェイクスピアは規則を守りながら、殺害場面を舞台で上演する以上の緊迫感・臨場感を生み出すのに成功しています。マクベスが良心の呵責に苦しみ、門をノックする音にさえ良心がうずく描写が見事でございませぬ。

劇の問題は、誰がダンカンを殺したかに移ります。マクベスは、自分の罪を隠ぺいしなければなりません。身の危険を察知した二人の王子は、ロンドンとアイルランドに逃亡し、マクベスがスコットランド国王に即位します。けれども魔女の予言を知っているバンクォーは、マクベスを疑っているため、マクベスはバンクォーを殺害します。ところが、バンクォーの息子を取り逃がしたため、マクベスの不安は募るばかりです。マクダフもマクベスを疑っています。マクベスは、罪のないマクダフの妻と子供を殺害し、血に飢えたように敵を殺し続けます。

メタ・ドラマの視点から劇を考察すると、シェイクスピアは、11世紀のスコットランドを描いているのではなく、その背後で、16世紀のイングランドの悲劇、ヘンリー八世から続くイングランドの恐怖政治を描いているのだと説明くださいませぬ。

第五幕に入りますと、マクベスの陰に隠れていたマクベス夫人が再び登場します。殺人を断行するマクベスと距離を置く夫人は夢遊病にかかり、ついに自死に至ります。本日、13時30分よりイグナチオ教会では自死された方へのミサが行われていませぬが、劇が創作された当時、自死者への目は厳しいものでございませぬ。マクベス夫人の死の報告に接したマクベスは、よりによってこのような時に夫人が自死すると戦意がそがれると嘆き、“Tomorrow, and tomorrow, and tomorrow”の名台詞を語ります。この台詞の大部分に聖書が響いている点を丁寧に神父様にご説明くださいませぬ。神父様は、マクベスに焦点を当てると悲劇だが、スコットランド全体にとってはマクベスの死で平和が戻るという意味で喜劇であるとコメントされ、お話が終わりました。

第二部：対談と質疑応答

質問1：門番の場面に関するご質問です。先ず、イエズス会士ヘンリー・ガーネット神父（Henry Garnett, 1555-1606）との関連及び門番の場面における聖書の影響についてとのご質問をいただきました。

お答え：神父様は、この場面は“comic relief”（喜劇的息抜き）の場面であると同時に、1605年11月5日にガイ・フォークス（Guy Fawkes, 1570-1606）らが議事堂爆破を企て失敗した“The Gunpowder Plot”（火薬陰謀事件）後、逮捕されたイエズス会士ヘンリー・ガーネット神父との関連をご指摘になりました。さらに、当時、“tyrannicide”（暴君殺害）を容認するイエズス会士の発言をイエズス会総長が諫めたとのエピソードを披露されました。ガーネット神父は、当局の取り調べの際、証拠をつかまれないように、“equivocation”（あいまい表現の使用、二枚舌）を駆使して、当局の追求を巧みに言い逃れました。このことから、イエズス会士の“equivocation”（二枚舌）がイングランドで問題視されたのです。門番の場面では、イエズス会士の二枚舌が否定的な意味で用いられています。今日では、この箇所もシェイクスピアだという解釈が一般的ですが、神父様は、シェイクスピアの手による部分ではないと判断しておられます。

神父様は、門番の場面に影響を及ぼしているのは聖書ではなく、聖史劇の“Harrowing of Hell”（地獄の征服）と指摘されました。“Harrowing of Hell”について少し解説を加えますと、イエズス様が十字架にかけられた後、死者が住む地獄（神学者は厳密に地獄ではなくリンゴであると区別しますが）の門を叩き、アダムとイヴをはじめ死者を救済する場面を聖史劇で上演していました。この聖史劇の影響がみられるとのお話でございました。

質問2：マクベス夫人は悪女と言われ、強い女性に見えますが、劇が進行するにつれ、マクベスは罪を重ねて行く一方、マクベス夫人は心を病むようになります。シェイクスピアは、女性のやさしさを表現しているのではないのでしょうか？

お答え：神父様は、むしろマクベス夫人の強さを強調されました。

質問3：シェイクスピアは、悪魔学（Demonology）に関心が深かったジェームズ一世を意識して『マクベス』を書いたといわれますが、シェイクスピアの魔女の描き方をどのようにお考えですか？

お答え：ジェームズ一世の王妃アンがデンマークからスコットランドに嫁ぐ折、嵐に遭遇しました。当時、スコットランド国王ジェームズ六世だったジェームズ一世は、嵐が魔女のせいだと考え、魔女に興味を抱いたことをご説明くださ

いました。一方、魔女狩りは、17世紀、清教徒革命を行ったオリヴァー・クロムウェル（**Oliver Cromwell,1599-1659**）の時代や30年戦争の頃に流行し、新大陸のセイレム（**Salem**）でも厳しく行われており、魔女狩りに反対したのは厳しい宗教裁判を行ったスペインであったと、17世紀の魔女狩りに関してご説明くださいました。

その後、慣例に従い、神父様に倣って、全員でマクベスの名台詞“**Tomorrow, and tomorrow, and tomorrow**”を朗読しました。その際、この台詞の大部分が聖書からの語句であると詳しいご説明がありました。以上で、第七回目は終了いたしました。